

なんてさまの青鬼と赤鬼

その昔、小倉の里(上小倉)に疫病が広まり、村人たちは大変不安な生活をしておりました。ある時、困り果てた村人の一人が、

「この疫病から人々を守らにやなんめえ、どうしたらよかんべ。」
と思案にくれておりました。

「この疫病から人々を守るには、男体山と湯殿山の神様にお願いするしかあんめえよ。」
ということになり、村人数人で男体山と湯殿山に祈願に行くことになりました。祈願を済ました後、小倉の里に帰り、男体山と湯殿山の石碑を建て、

「どうか神様、流行病にかかんねえようにおねげえします。」
村人はお供え物を供えてねんごろにお参りしたのでした。そのかいあってこの地では疫病から免れることができたということです。

その後村人は、これからも疫病が広まらないようにと、



「こっちは、男体山と湯殿山の偉い神様がいるんだぞ、疫病神はこの橋を渡って来てはなんねえぞ。」

と、根川の橋のたもとに大きな草鞋をさげて疫病神をこの地域に入らせないようにしたという事です。この草鞋は、道切草鞋といって村境を意味するものでしたが、後に集落の入口に大きな草鞋を吊るすことにより、「この集落にはこのような大草鞋をはく力持ちの大男がいるので、病魔が来ても歯が立たねえ、やられっちまうから、とっとと帰れ。」
ということにしたともいい伝えられています。

ところで、この地にはその昔、青鬼と赤鬼が住んでいました。この青鬼と赤鬼は筋骨隆々とし、恐ろしいほどの力持ちであったのです。しかし、気はやさしく、村人のためには何かと気配りをしたそうです。

ところで、この青鬼と赤鬼は、村人たちが大変難儀をしていることを心配していたのでした。

ある日のこと、青鬼と赤鬼は村はずれに祀られている男体山と湯殿山の石碑のそばを通りかかり、しげしげと眺めながら、

「こんなでけえ石碑を土台石も置かねえで、ここにおいたのではすぐにでんぐりげえつてしまふべや。それに第一土台がねえなんて粗末に扱ひすぎるぞや。」

と、土台石を探しに東鬼怒川に出かけました。何日か探し回りやっと手ごろな石を探すことができました。

その石は長さ二メートル、真ん中の幅が一メートルほどのとてつもなく大きく重い石でした。青鬼と赤鬼はさっそくその石を掘り出し、二人で担いできましたが、途中で、青鬼は、

「なア、赤鬼や。おらあ目ん玉から螢が飛び出そうだぜや。」
と、その石の重さに汗だくだく。赤鬼は大豆ほどの大粒の汗を手でぬぐいながら、
「青鬼や、おらあ、あばら骨がたたまりそうで、あんべえ悪くなりそうたぜや。」
息も絶え絶えでした。

青鬼と赤鬼は、難儀をしながら、やっとの思いで担いできた石を土台にして、男体山と湯殿山の二つの石碑を安置しました。

「やれやれ、これで神様も座り心地がよかんべ。これならでんぐりげんねえですむべや。」

と、ほっと胸をなでおろしました。



なんて様

いつのころからか、この石碑が置かれている場所を村人たちは『なんてさま』と呼ぶようになりましした。そして、田の神、山の神として田畑の農事が一段落すると、秋の實りを祈ったり、無病息災を願ったりする祭りとして、地元民が毎年七月の丑の日に赤飯などを供え、お祈りをしています。その赤飯は小さなおにぎりにして、一時供えた後、村人の各人が家に持ち帰り家族全員に分け与えたのです。

「この赤飯を食えば、病気になるねえんだぞ。皆んな食え。」
と、嫌いでも無理やり食べさせられたのでした。

この祭りについては、地元では山倉様として現在でも継承されています。この男体山と湯殿山の二つの石碑がこの場所に安置されたのは、天保六年三月と記されています。また、青鬼と赤鬼はこの地に住んでいた義左エ門さんと半左エ門さんの二人であつたと伝えられています。村人たちは青鬼義左エ門、赤鬼半左エ門とも呼んでいたそうです。

ともあれ、あのような大きな重い石を、当時どのような方法で運んできたのか、地元の人々は、

「なんぼ力持ちでも、二人で担いできつちまつたとはなあ。」
と、その力持ちのほどに、あきれ驚きながらも大切に見守り続けているのです。